

平成二十六年
日本大学第三中学校入学試験問題

国語

〔注意〕

- (1) 「始め」の合図があるまで開いてはいけません。
- (2) 解答用紙に受験番号・氏名を忘れずに記入しなさい。
- (3) 試験時間は五〇分です。
- (4) 「終わり」の合図があったら、解答用紙だけを提出しなさい。

〔一〕 次の一線のカタカナを漢字になおしなさい。

- 1 毎月ヤチンを払う。
- 2 マズしい国を助ける。
- 3 木のミキの太さを測る。
- 4 国同士がドウメイを結ぶ。
- 5 かれは法律のセンモン家だ。
- 6 セイケツなタオルで手をふく。
- 7 新しい本がシュツパンされた。
- 8 この問題はヨウイに解けるはずだ。
- 9 台風が大きなソングイをあたえる。
- 10 遊園地のニュージヨウケンを買う。

二四歳、大学院修士課程二年の時に、もう一度、教員採用試験を受けました。

今回の教員採用試験は絶対に失敗できないという思いがありました。これ以上、親のスネは**か**じられない、そろそろちゃんと就職して、親孝行しなくては、という思いがあり、一所懸命に勉強しました。

こうして人生二度目の教員採用試験に挑戦。結果は、なんと、一次試験合格。

二次試験は面接や模擬授業。これには自信がありました。実際に、うまくいったと思えました。

A、届いた結果は不合格。どん底にたたき落とされました。私は大学入試、就職試験という人生を左右する大きな試験に三連敗しているのです。

その時は、本当に辛かったです。苦しい日々を過ごしました。これから先、どうなるか分からない不安に苦しみました。母にも心配をかけた。した。

でも今、私は、「あるとき落ちてよかった」「失敗してよかった」と心から思っています。

あるときに合格していたら今の私は絶対にありません。合格していたら、大分県で学校の先生をしているはず。学校の先生も素晴らしい職業ですが、今のように、本を書いたり、その本を「あなたに」読んでもらったり、ということとはなかったでしょう。

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

この本を読んでいるみなさんの中には、これから受験に臨むという人も多いでしょう。

ものすごいプレッシャーやストレスを感じている人もいるでしょう。「受験に落ちたら、人生が終わるんじゃないか」なんて思い詰めている人もいるかもしれません。

私も、これまでの人生で、何度も受験しました。

一八歳の時には大学入試。結果は大失敗でした。九州大学レベルにはとても成績が達せず、しかも、第一次志望の大学からも不合格通知が届きました。期待を寄せてくれた先生方にも合わせる顔がありません。人生で初めての挫折でした。

そして、滑り止めで受けた福岡教育大学に通うことになりました。

二二歳、大学四年生の時には、教員採用試験。学校の先生になるための試験です。結果は不合格。当然です。アルバイトとサークル活動に明け暮れ、全く、勉強しなかったんですから。

私は、大学院に進学することになりました。

大学のさらに上にあるのが大学院です。修士課程二年、博士課程三年に分けられます。大学院っていうと、「もつと勉強したい」という人が行くようなイメージがありますが、実際には、私のような、就職できなかった人が行くというケースもかなりあります。

私は、今の私がつても好きなので、「あるとき落ちてよかった」「失敗してよかった」と心から思っています。

そして、高校生の時には九州大学に合格できなかった私が、今、九州大学の先生をしています。

社会って不思議でしょう？

人生って不思議でしょう？

でも社会も人生も、こんなものなのです。

人生は大きなパズルのようなものだと思うのです。

高校受験、大学受験、これからいろんな挑戦をしなければなりません。挑戦すれば、その成果として一つのパズルのピースが与えられます。

空いている「そこ」にピタッと当てはまる、自分が望むピースをもらえればいいのですが、どう使っているのか分からない、どこにはめていいのか分からない、ピースをもらうときもあります。

前者がいわば「合格」という形のピースであり、後者は「不合格」という形のピースです。

だけど、今必要ないからといって、そのピースが無駄か、不必要かというところを決してそんなことはありません。いつか、きつとピタッと当てはまる箇所が出てきます。三〇歳か、四〇歳か、五〇歳か。いつか、きつとピタッと当てはまる箇所が出てきます。

そのときになって思います。「あー、あの経験はこのためだったのか」って。

(1) 私だって、あの不合格の経験をネタに、今、こうして本を書いています。人生に不必要なピースはありません。そのピースがなければ、人生の絵は完成しないのです。

もつと大切なことがあります。

不合格はキツイです。失敗はツライです。だけど、不合格や失敗を恐れて、決して挑戦を止めてはいけません。

挑戦しなければピースはもらえないのです。

挑戦しなければ、人生をかけて創ったパズルは一〇〇ピースくらいの小さな、小さな絵になってしまいます。

挑戦する。そうすれば、成功というピースも、失敗というピースもたくさんもらえます。でも、大きな絵ほど、そのピースがどこに当てはまるのか難しくなります。

一〇〇ピースのパズルより、一万ピースのパズルのほうが難しい。一〇万ピース、一〇〇万ピースのパズルのほうが難しい。

でも、いつか「その」ピースがぴったりとはまります。三〇歳か、四〇歳か、五〇歳か。それがはまれば、その周りのピースも一気にはまるようになります。

そして、いつか自分の人生を振り返るときに、大きな大きな、いろど鮮やかな、ダイナミックなドラマチックな、えが自分にしか描けない絵が、きつと描けているはずですよ。

将来、成功したいなあ、お金持ちになりたいなあ、つて考えている人

成功は一部の人間にしか保証されていませんが、ばんにん成長は万人に保証されています。成長しない人間なんていません。もし、その成長に喜びを感じることができれば、みんなみんな幸せな人生を送ることができます。しかも、成功を計る要素は一面的です。トイレ掃除そうじをしても、バスでお年寄りに席を譲ゆずつても、「成功したね」なんか言われません。お金とか、学歴とか、社会的評価とか、そんなことだけに成功という言葉は使われず。

C、成長を計る要素は多面的です。一か月前は、イヤでイヤで仕方なかったトイレ掃除がいつのまにか、当たり前になる。今ではキレイになっていくことに喜びを感じる。それも成長です。昨日は、勇気がなくて、お年寄りに席を譲れなかったけれど、今日はできた。それも成長です。

そんな、いろんな力を伸ばせる人生のほうが絶対に幸せです。成長に喜びを感じる、そんな価値観を身につけましょう。

とはいえ、やっぱり成功したい、お金持ちになりたいって考えも捨てることできないと思います。

こんなことを書いている私もそうです。その思いを無理に捨てることはありません。その思いは、行動の原動力となります。モチベーションモチベーションになります。

ただ、6成功にとらわれ過ぎると、成功できないのです。

ある大学生に「先生は、よく、次から次にいろんなことに挑戦してま

は多いと思います。

友達がみんな持っているのに、お金がなくて、欲しいモノも買えない、というのは、やっぱり辛い。私もそうでした。

私たちは、成功というものに喜びを感じます。テストでいい点をとる、いい大学に合格する、有名になる、お金持ちになる、高い社会的地位を得る、とかです。

だけど、成功しなければ、お金持ちにならないければ、幸せな人生を送れないかというところ、そんなことはありません。**B**、成功しなければ、お金持ちにならないければ、幸せな人生を送れないとすれば、幸せな人生を送れる人なんて、ごくわずかです。

3成功って、他の人と比べる考え方なのです。「他の人より」いい大学に合格する、「他の人より」有名になる、「他の人より」お金持ちになる、「他の人より」高い社会的地位を得る、という具合です。

でも、人と比べていたら、一生、幸せな人生なんて送れません。だって、世の中には、あなたより、かつこよくて、かわいくて、有名で、お金持ってる、社会的地位が高い人なんて、いくらでもいるのです。

大切なのは、人と比べることではなく、自分と比べること。4これを成長と言います。一年前の自分と比べて、どれだけ伸びているか。一か月前の自分と比べて、何ができるようになったか。昨日の自分と比べて、どれくらい頑張がんばれたか。

すね。失敗するのが怖こわくないのですか？」と聞かれたことがあります。九州大学に入学してくる学生って、本当に優秀ゆうしゆうなんです。みんな、小さい頃から、「頭いいね」と言われ、親や学校の先生の期待にちゃんと応えてきました。中学校では学年一、二位。高校受験に合格し、高校に入っても、成績は上位。そして大学受験にも見事に合格。これまでの人生で大きな失敗をしたことがないのです。だから失敗が怖いのです。失敗が怖いから、挑戦できなくなります。

自分がやったことないこと、できないことに挑むむのが挑戦です。やっていること、できることをやるのは挑戦ではありません。やったことないこと、できないことに挑むのですから、失敗する可能性は高くなります。だから、挑戦しないのです。

でも、挑戦しなければ、成長はありません。できることは増えていきません。新しい世界を見て、新しい考え方や新しい力を手に入れることはできません。

そんな人が成功できるでしょうか。成功にとらわれ過ぎると、成功できないのです。

一方、成長に喜びを感じる、そんな価値観を身につければ。成長には挑戦が不可欠です。失敗してもいい。その失敗が成長につながるのですから。

そうして少しでも成長した自分が、以前、失敗したことに、再び挑戦する。もしかしたら、また失敗してしまうかもしれませんが、それでも、

また成長できるのです。

それを繰り返していけば、できなかったことも絶対にできるようになります。挑戦と成長を止めなければ、いつか必ず、それに打ち勝つことができるのです。

挑戦と成長に満ちあふれた人は、結果として、成功もついてくるのです。

(佐藤 剛史)

『大学で大人気の先生が語る〈失敗〉〈挑戦〉〈成長〉の自立学』

※1 サークル活動 || 同じ趣味を持つ人たちが集まってする活動。

※2 モチベーション || ある目標や行動を決定するときのきっかけ。

問二 ———— 線(a)「合わせる顔がありません」・(b)「スネはかじられない」

の意味として最も適当なものを次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

(a)「合わせる顔がありません」

- ア 緊張して、堂々と見ることができない
- イ 恐ろしくて、冷静に見ることができない
- ウ 悲しくて、まっすぐに見ることができない
- エ 申し訳なくて、きちんと見ることができない
- オ 照れくさくて、しっかりと見ることができない

(b)「スネはかじられない」

- ア 頼って生活するわけにはいかない
- イ いい加減にふるまうわけにはいかない
- ウ 反抗的な態度をとるわけにはいかない
- エ いつまでも心配をかけるわけにはいかない
- オ ふてくされて意地を張るわけにはいかない

問一 本文中の A } C にあてはまる言葉として最も

適当なものを次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二回使ってははいけません。

- ア ただし イ もし ウ つまり
- エ しかし オ さて カ 一方で

問三 ———— 線(1)「人生に不必要なピースはありません」とありますが、

それはどうしてですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

- ア 人生そのものが無駄な経験ばかりであるため、数多くの失敗が必要だから。
- イ いつか自分の人生を振り返るときに、無駄な経験はなかったと思うことができるから。
- ウ 無駄な経験をした人の方が、ダイナミックでドラマチックな人生を送ることができるから。
- エ 長い人生の中で成功するためには、他の人よりも多くのピースを持つている方が有利になるから。
- オ 一〇〇万ピースのパズルを完成させるには、不必要なピースでも当てはめなければ数が足りなくなるから。

問四

——線(2)「自分にしか描けない絵」とありますが、どのようなことをすれば「自分にしか描けない絵」を描くことができますか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア 失敗を恐れることなく挑戦する心を持ち、人生の中でさまざまな経験をすること。

イ 不合格や失敗はツライので、確実に成功できることだけをを選んで挑戦していくこと。

ウ 失敗というピースは捨てて、成功というピースだけを集めながら当てはめていくこと。

エ 一度きりの人生だからこそ、過去を振り返らずに未来だけを見つめて進んでいくこと。

オ 大きな絵を描こうという気持ちを常に持ち、日常生活でもそれを意識しながら過ごすこと。

問五

——線(3)「成功」、——線(4)「成長」にあてはまる例を次の中から選んで、「成功」をA、「成長」をBとして記号で答えなさい。

ア 若くして、大きな会社の社長になった。

イ コンピュータ関連の会社を起こして、お金持ちになった。

ウ 毎日水泳の練習をして、二十五メートル泳げるようになった。

エ 自分で書いた本がベストセラーになり、それが映画化された。

オ 今まではポイ捨てされたごみを無視して歩いていたが、今はゴミ箱に捨てるようになった。

問六

——線(5)「成長は万人に保証されています」とありますが、どのようなことをいっていますか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア 周囲から認められることで自分に自信が付き、前向きな気持ちで物事に取り組むということ。

イ 人間は生まれながらにして才能に満ちあふれているため、不可能なことはないということ。

ウ 社会的地位や名声を得られるチャンスは、誰にでも平等に与えられているということ。

エ 年をとれば誰でも成功を手に入れられるので、幸せを実感できるといふこと。

オ 誰もが以前の自分よりも、成長できる可能性を持っているといふこと。

問七

——線(6)「成功にとらわれ過ぎると、成功できないのです」とありますが、それはどうしてですか。次の文の□にあてはまる言葉を本文中からぬき出して、X、Yは二文字、Zは十一文字で答えなさい。

成功ばかりを求めると、□X□が怖くなつてしまい、やつ

たことのないことやできないことに□Y□しないため、

□Z□を手に入れることができず、成功できないから。

問八

幸せな人生を送るためには、どのような生き方をすればいいと筆者は考えていますか。わかりやすく説明しなさい。

〔三〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

試合まで毎朝みんなで走ることにした。

朝六時、道場の前に集合。くねくね坂を下り、通りをこえて川沿いの道を走り、中央公園で折りかえして道場にもどる。

「翼は無理しないように」

光希にきびしく言われても、「へいきへいき！」と翼は走りつづけた。いつもリュックにぜんそくの薬の吸入器を入れているし、礼奈がペースをあわせてくれる。

淡々と、寡黙に走る礼奈の姿は、みんなに影響をあたえた。

三年生の女の子に負けてはられない。悠太は勝手にペースを上げ、すぐにみんなから見えなくなった。三日めには単独トレーニングに切りかえると行って、ランニングだけでなく、道場の稽古にも出たり出なかつたり。光希はもうなにも言わず、礼奈を見習って自分の稽古をつづけることにした。

礼奈に負けられないと思ったのは、太郎もおなじだった。しかし、毎朝のランニング以上に苦痛なのは、組手だった。なぐられたことは何度もあるけれど、ひとをなぐったことは一度もない。調子にのっておばあちゃんに突きを入れたときだって、そんなつもりじゃなかつたのだ。

「太郎、気合入れて、思いっきり撃つてごらん！」

光希に言われても、ミットにふれる直前、力が抜けてしまう。

お昼休みのグラウンドに、光希の凛とした声がひびく。

四人で〈型〉の稽古だ。

正拳が蒸し暑い空気を突き、手刀が雑念を断ち切る。

〈型〉はひとりひとりが動きつつ、全体の気をひとつにする。ひとりが四人になり、四人がひとりになる。心臓の鼓動を大地に伝え、大地から〈気〉を受けとる。

六年一組の窓から、悠太が見ている。

日を追うごとに、興味のある子たちが見学していくようになる。

ついにある日、教頭先生がやってきてしげしげ見詰め、「ほう、いいもんだねえ」とつぶやいた。

翼も礼奈も太郎も、〈勝利の女神〉に興味をもった。

まったくおなじ強さの選手がいたとして、闘ったときに勝つのはどちらか。

日ごろの生活の心がけ、そのひとつひとつで、〈勝利の女神〉がほほえんでくれる。

武空会館の道場生ならみんな知っているその話を、光希はいま、新しい仲間に伝えようとしている。

(4) 「靴をそろえるのにだって、意味があるんだよ」

「意味って？」

「わたしたち、両足で地面につながっているでしょ？」

不動立ちからゆつくり右足をすべらせ、三戦立ちになる。

それで、〈約束組手〉を何度も稽古することにした。〈約束組手〉は攻める側と受ける側の動きをあらかじめ決めておくので、向きあっても恐怖心はない。

「おたがいに礼」から太郎が下段に構え、右足を大きく踏みだしながら突く。その突きを光希が上段受けで止め、太郎の中段に逆突きする。両者の動きを交代してつづける。

〈約束組手〉のありつたけのパターンを、太郎はがむしやりに習得していく。

それを見ながら翼と礼奈も、タタタ・タン！ とリズムカルに速さを競いあう。

五年二組のクラスには、いまも〈桃太郎〉とよんでばかりにする男子たちがいる。

めぐみ先生からは、空手は危険という思いもぬぐいされずにいる。けれど二生懸命に稽古にはげんでいると、冷たい目は気にならなくなり、心ないことは耳に入らなくなる。

集中。そして〈押忍〉の精神だ。

莉子は五年二組の掲示板上に、〈JKA空手道関東大会〉のポスターをはつてくれた。

「すごいね光希、応援に行っていない？」

しいちゃんはめがねの奥で目をきらきらさせた。

「平安、一！」

「こうしていることは、大地から〈気〉をもらっているってこと。それが生きてるっていうこと。おじいちゃんに教わったこと、そのまま言うてただけだけど」

うんうん、と三人はうなずきながら、足もとをたしかめる。

「ぬいだ靴をそろえることは、〈気〉をそろえること。みんなの靴がそろっていると、みんなの心もそろってこと」

「へえー！ ってことはさ、靴がそろってる家は、家族が仲よしってこと？」

翼の質問に、

「そうだね」

太郎がちよつと得意げにこたえる。

「うちは毎日おばあちゃんが玄関そうじして、靴はきれいにそろえてくれるからね」

「おばあちゃんにまかせつきりじゃ意味ないじゃない」

光希は笑って太郎をこづく。

「今日からは太郎が自分でやらなくちゃ、ね」

「そっか……あはは」

礼奈はだまったまま、自分の家の玄関を思いうかべている。

いつもお母さんはサンダルをぬぎ散らかしっぱなし。礼奈がそろえておいても、またぬぎっぱなし。片方がとんでもないところどころがつていることもある。それでも根気よくそろえつづける。礼奈の靴とお母さ

んのサンダルを、仲よく並べる。そこに、お父さんの靴が並ぶことを想像する。

今日も家に帰ったら、お母さんのサンダルをそろえよう。

礼奈はそんなことを考えながら、黙々と《型》の稽古をつづける。

一週間がたち、二週間がたち、窓から見えているだけだった悠太が、グラウンドにやってくる。

太郎の引き手のあまさを、ぐいと引っぱって気合を入れてやる。

ギャラリーの女子たちから、きゃあつと声があがる。

「それが目的？」とあきれて笑う光希。いっしょになって、翼も、礼奈も、太郎も笑う。

そうして七月の終わり、大濱道場に、あの音がはじける。

バンッ！

太郎がビッグミットを力いっぱい撃つ音だった。

日曜の朝、自動車整備工場の前に光希たちの姿はなかった。

試合一週間前。悠太はランニングに復帰する気になって、早朝やってきたのだが、だれもない。道場を見上げると、なにかおかしい感じがした。

階段を上り、あけはなされた入り口からなかをのぞく。

薄暗い室内に目がなれるにつれ、異様な光景が悠太の前にひろがった。壁や鏡にスプレーで書かれた《いんちき道場》のいたずら書き。床には

「おれ、犯人はわかってるんです！」

「だまれ」

大きな手のひらが、悠太の頭をがしつとおさえた。

「手軽に熱くなれる敵がほしただけだろう。おまえはいつもそうだ。頭を冷やして、いまほんとうにやるべきことだけをしろ」

「いま、やるべきこと……」

試合に向けての稽古。受験勉強。とりあえず道場の現状復帰。いやいや、それよりも、まだ大濱先生にあやまつていない。あやまるなら、いまだ……と、悠太はつばを飲みこんだ。

そのとき、どたばたと階段を駆け上がってくる音がした。

「た、たいへんだ、た、た、助けて!!」

太郎が飛びこんできた。

光希たちは中央公園で少年たちにとりかこまれていた。

公園までランニングしたあと、木立で《型》の稽古をしていたところだった。

(b) いつものように、ひとり遅れをとって到着した太郎は、その光景を見るやいなや、道場に引きかえした。

「桃太郎！ おまえだけ逃げたのか!?!」

悠太にどやされ、太郎はがくがくと首をふった。

「ち、ちがっ……翼のお母さんをよびに行こうと思って、でも家がわか

泥の足あと。ミットは散乱し、カッターナイフで切り裂かれたのか、なかのウレタンが無残にはみ出ている。

「……なんだよ、これ……」

悠太の脳裏に、大介のへらへら笑いがかんた。

「あの野郎のしわざか……」

そのとき、ガタンと音がして、悠太はとっさに攻撃の姿勢で引き戸に向き直った。

「なんだ、おまえか」

大濱先生がコンビニ袋をさげて、ひょうひょうと入ってきた。

「あつ……お、押忍」

悠太は十字を切った手を、あわてて左右にふった。

「これやったの、おれじゃないすよ、おれ、いま来たばっかで」

「そんなことはわかっている」

大濱先生は、コンビニで買ってきたガムテープで、破れたミットの応急手当てをはじめた。悠太はしげんに手を貸し、ミットをささえた。

「こういうのって、警察に言っても、なんにもしてもらえないんですよ。」

「だったらおれが、犯人をしめてやります」

「鍵をかけていなかったせいだ。こつちが悪かった」

「つて、泣き寝入りするつもりですか」

「何度もおなじことを言わせるな。今日から戸じまりに気をつける、それだけだ」

「らなくて……」

悠太は全力疾走で公園まで走った。

思ったとおり、少年たちのなかに大介の姿があった。政拳塾の連中だ。やつらは翼のリュックからぜんそくの薬の吸入器をうばい、パスしあっている。

「かえして。この子のだいいなものなの」

光希はひとりで大介たちと対峙していた。

翼は地べたにうずくまり、その背を礼奈が必死にさすっている。

大介の後ろから近づいた悠太は、ダボダボのジーンズにいきなり横蹴りを入れた。

「いてッ!!」

しりもちをついた大介は、逆光のなかに悠太の顔を認め、にやにや笑いをうかべた。

「よお、悠太じゃねえか、ぐうぜーん」

「うちの道場荒らしたの、やつぱりおまえらだな」

「え、なんの話？」

「とぼけんな。土足で上がって道場めちやくちやにしゃがって、あれはりっぱな犯罪だぞ!」

「へんな言いがかりつけないでくんない？ おれたち、いんちき道場になんか用はねーよ、なあ、みんな」

「こまかすな」

「証拠でもあんのかよ」

光希に引っぱられて、悠太は翼を見た。翼の顔はおそろしいほど白く、ゼコゼコと小刻みな息をつづけている。

「道場の話はもういい、吸入器をかえせ」

「おまえからはじめといて、もういいって、なんだよそれ。あいかわらず自己チュー……」

悠太が大介のあごをつかんでまらせた。

「早くかえせて言っただよ！」

大介の蹴りが悠太をねらった。かわした悠太はそのひざを引っかけ、ねじふせる。大介がすかさずタックルし、悠太もころぶ。「けんかはだめ！」光希は叫んだ。

——空手の技を使ってけんかをするのは

悠太ははつと、つかんでいた手をはなした。大介は悠太をひと蹴りして立つと、にやにや笑いで言った。

「おまえらさあ。いんちき道場のくせに、JKAの団体戦に出るんだって？ なに考えてんの？ みんな迷惑してんだけど。出場辞退したほうがおまえらのためじゃね？ 辞退するなら、すぐかえしてやってもいいけど、どうする？」

(5) 目的はそれだったのか。悠太の拳がふるえた。

「なあ悠くん、どうなのよ？」

大介の内股蹴りが悠太にあげせられる。悠太は固めた拳をいまにも

セミの声がきわだった。

悠太があらためて大濱先生に頭を下げようとしたとき、

「もういい。……それでいい」

大濱先生は、静かな声で言った。

光希と悠太はしんみりと目をあわせた。

「さて、と」

顔を上げた大濱先生は、すがすがしく笑っている。

「道場へ帰って稽古をするぞ」

「えっ、でも、きょうは日曜日……」

「日曜に休む余裕があるか。試合まであと何日だと思ってるんだ」

光希はぱつと笑顔になり、「押忍！」と十字を切った。

(7) つづいて悠太が「押忍！」、太郎、翼、礼奈も、力強く「押忍！」と

十字を切った。

(小川 智子 『ストグレ!』)

※1 平安、一 || 型の稽古をするときのかけ声の一つ。

※2 三戦立ち || すべての技において、それをくりだす前の基本姿勢。

※3 対峙 || 向き合って立つこと。

爆発させようとしている。

「わたしたち、試合に出ます。試合で正々堂々と闘います」

光希が落ち着いた声で言った。

——勝利の女神。

悠太は拳を構えたまま立ちつくしていた。

頭上でいちようやけやきの木が、豊かな緑の葉をささやと風に遊ばせている。木もれ陽のちいさな光のきらめきは、突きだされたままの悠太の拳に、寶石をのせたようにゆれていた。

一瞬のうちに、悠太の脳裏にさまざまながよみがえった。

「……ごめん、大介」

(6) 拳を引っこめると、悠太はいきなり頭を下げた。大介たちは「えっ？」と一歩引いた。

「保育園のころから、なんべんも大介に悪いことしたと思う。ごめん。あやまるから、吸入器を、かえしてくれ」

それをにぎっていた少年が気味悪がつて放りだした。すぐに礼奈がひろい、翼の口にあてた。

「ごめん」——悠太は光希にも言った。

「ごめん」——その背後にかけた太郎にも。

大濱先生がやってくるのを見て、政拳塾の少年たちは潮が引くように木立のむこうへ去っていった。翼はおだやかな呼吸をとりもどしつづけた。

問一 次の登場人物の説明の中から、あてはまらないものを一つ選んで、

記号で答えなさい。

ア 太郎は、桃太郎とあだ名をつけられている。

イ 礼奈は三年生で、翼の面倒をよくみている。

ウ 光希は、政拳塾に所属している女の子である。

エ 大濱先生は、光希たちの通う道場の先生である。

オ 翼はぜんそくをもっているが、空手を習っている。

カ 悠太と大介は、保育園の頃からの幼なじみである。

問二 — 線(1)「みんなに影響をあたえた」とありますが、太郎にはどのような影響をあたえましたか。次の文の にあてはまる言葉を本文中からぬき出して、Xは十五文字、Yは五文字で答えなさい。(句読点などの記号も一文字に数えます。)

初めは光希に気合を入れるように言われても、 X
しまっていたが、(約束組手)を習得したり、学校のグラウン
ドで稽古けいこをすることで、ビッグミットを Y 撃うてるよ
うになった。

問三 — 線(2)「ぬぐいされずにいる」とありますが、これを言いかえ
た表現として最も適当なものを次の中から選んで、記号で答えな
さい。

- ア 取りのぞきたい
- イ 取りのぞこうとする
- ウ 取りのぞくことが大切だ
- エ 取りのぞくことができない
- オ 取りのぞけるかどうかわからない

問五 — 線(4)「靴をそろえるのにだって、意味があるんだよ」とあり
ますが、どのような「意味」がありますか。次の中から最も適当
なものを選んで、記号で答えなさい。

- ア 靴をそろえることは、家に入ったときに玄関げんかんを美しく見せる
ということ。
- イ 靴をそろえることは、おばあちゃんを助けることにつながる
ということ。
- ウ 靴をそろえることは、生きている喜びを感じることにつなが
ること。
- エ 靴をそろえることは、みんなの気持ちがそろうことにつなが
ること。
- オ 靴をそろえることは、それを教えてくれたおじいちゃんにお
礼をするということ。

問四 — 線(3)「勝利の女神」とありますが、光希たちにとってどのよ
うな存在ですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答
えなさい。

- ア 困ったときにはいつでも自分のために、力をあたえてくれる
ような存在。
- イ 稽古をすればするほど頼れる味方になり、勇気と力をあたえ
てくれるような存在。
- ウ 四人で毎日型の稽古をしていれば、必ずあらわれて力をあた
えてくれるような存在。
- エ お昼休みの稽古中にやってくる教頭先生のように、たくまし
く力をあたえてくれるような存在。
- オ 日常生活において、当たり前のことをきちんとやっていた人
に対して、力をあたえてくれるような存在。

問六 — 線(a)「泣き寝入り」・(b)「見るやいなや」の意味として最
も適当なものを次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

- (a) 「泣き寝入り」
 - ア 深く反省して落ちこむこと
 - イ 心を落ち着かせようとする
 - ウ 自分の意に反してあきらめること
 - エ だんだんと気持ちを切りかえること
 - オ やりかけていたことを途中でやめること
- (b) 「見るやいなや」
 - ア 見るとすぐに
 - イ 見たらなおさら
 - ウ 見て確かめると
 - エ 見ないようにして
 - オ 見ることができずに

問七 本文中の□にあてはまる四字熟語として最も適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 優柔不^{ゆうじゅうふたん}断
- イ 言語道断
- ウ 自画自賛
- エ 单刀直入
- オ 百発百中

問八 — 線(5)「目的はそれだったのか」とありますが、大介の「目的」は何でしたか。わかりやすく答えなさい。

問九 — 線(6)「拳を引っこめると、悠太はいきなり頭を下げた」とありますが、それはどうしてですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

- ア 光希が落ち着いて意見を主張したため、自分も対^{たい}抗^{こう}して冷静にふるまおうと思ったから。
- イ 大介の内股蹴りが自分にあびせられたことで、このけんかにも勝ち目はないと思ったから。
- ウ いんちき道場と言われた道場を守るため、自分がぎせいになつてあやまる必要があつたから。
- エ 苦しそうな翼の姿を見て、ここであやまれば必ず吸入器をかえしてもらえると確信していたから。
- オ 自分のあやまちに気づくと同時に、正々堂々とあやまることが大切だということに気づいたから。

問十 — 線(7)「つづいて悠太が『押忍!』、太郎、翼、礼奈も、力強く『押忍!』と十字を切った」とありますが、このときの悠太の気持ちをわかりやすく説明しなさい。

以下余白

